

第3章 歴史まちづくり戦略

1 戦略の基本理念

（１）戦略の目標

地域の歴史的資源を活かした、魅力的な都市環境の維持・形成に取り組むためには、市民それぞれが自分たちのまちを好きになり、誇りを持って身近なまちの歴史について語り合うとともに、歴史の流れを尊重したまちづくりを進め、世代を超えてまちの歴史を紡いでいくことが大切です。そのような観点から、「歴史まちづくり戦略」の目標を次のように掲げます。

～人・まち・歴史をつなぎ、絵となり物語となり、時とともに熟成する～

「語りたくなるまち名古屋」の実現

～身近に歴史が感じられ、もっとまちが好きになる～



（２）協働理念

歴史的な町並みや建造物などをはじめとするまちの歴史的資源は、市民共有の財産であるともいえます。そのため、地域住民・行政をはじめとする様々な主体が協働しながら、歴史的資源を活かしたまちづくりに取り組んでいくことが必要です。

歴史まちづくり戦略では、多様な主体が協働してまちづくりに取り組むための協働理念を、次のように掲げます。

歴史的資源をみんなでまもり・いかし・つなぐ

2 戦略推進の視点

地域に残された歴史的資源を積極的に保存・活用することにより、身近に歴史が感じられるまちづくりに取り組むとともに、市民それぞれがまちに誇りを持ち、次世代にまちの歴史を語り継いでいくため、以下の3つの視点を掲げます。

視点 1

気候風土や地形を背景にした、古代から現代に至る都市の形成過程や、地域に残された歴史的資源（モノ・コト）を大切にします。

- ・名古屋の歴史の基礎となっている、気候風土や地形といった背景も踏まえながら、まちづくりを推進します。
- ・古代熱田における文化の興隆～近世城下町としての都市の形成と発展～近代における産業都市化による大都市への飛躍～大胆な都市計画による戦災からの復興など、幾多の歴史の積み重ねによる、重層的なまちの構造を大切にします。
- ・建造物や史跡といった有形の歴史的資源のほか、地域における伝承や人々の営みについても幅広く歴史的資源として捉え、まちづくりに活かします。

視点 2

いきいきとした生活・交流の息吹が感じられるまちづくりを目指し、市民（生活者・来訪者・事業者等）の視点を大切にします。

- ・歴史は市民の生活文化に根ざすものであることから、市民の生活の質の向上を図ってゆく視点を大切にします。
- ・地域の歴史的資源を活用した、地域内交流、地域間交流を促進します。
- ・「市民」とは、生活者（地域住民等）だけではなく、来訪者（観光客等）や事業者（事業者等）についても幅広く含めて捉えるものとし、異なる立場の市民の相互理解・相互協力を図りながらまちづくりを推進します。

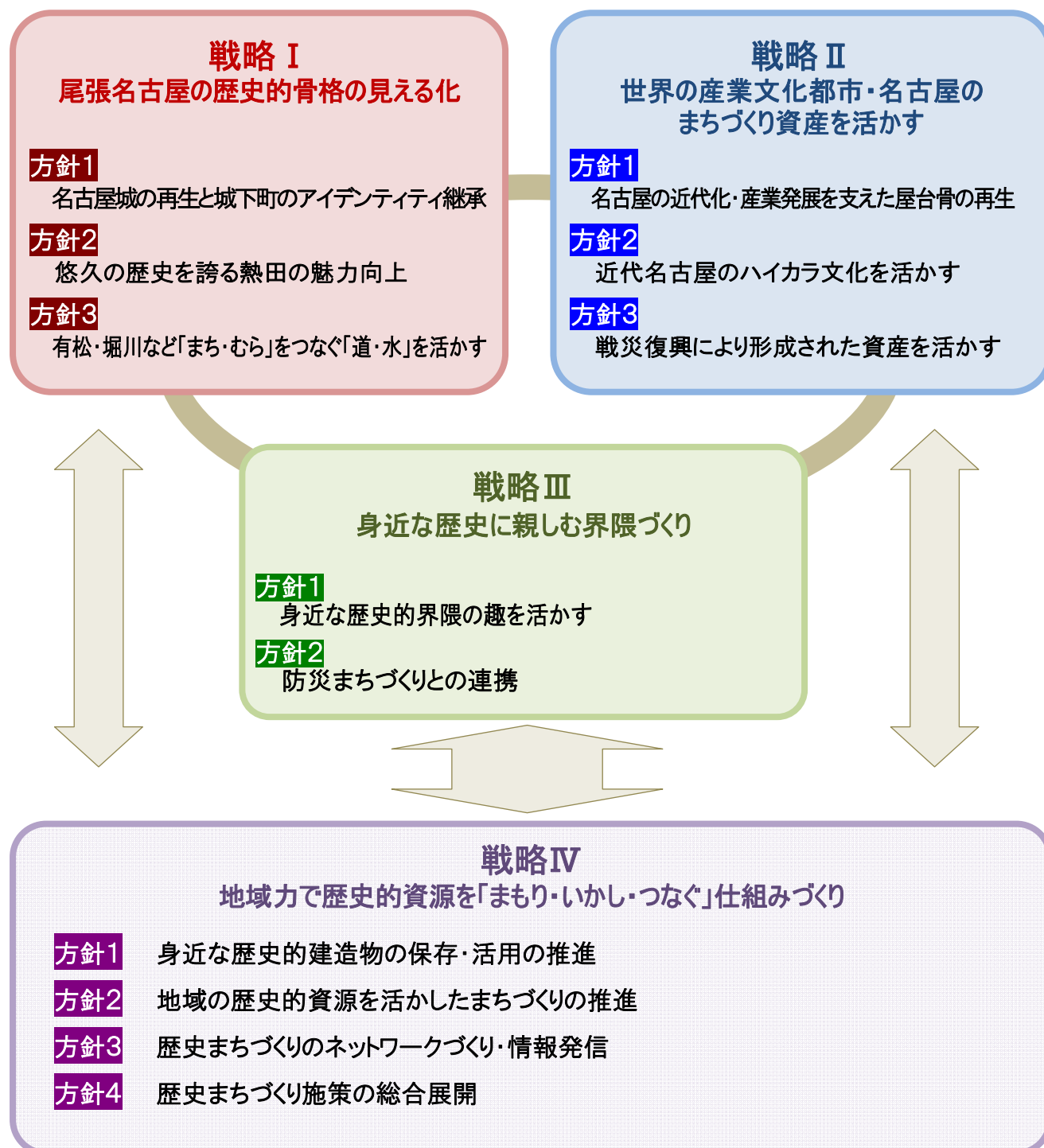
視点 3

環境、文化、観光など、分野横断的な取り組みを推進し、総合的な地域まちづくりの視点を大切にします。

- ・環境、水、緑、文化・観光、産業、都市計画・景観など、歴史まちづくりに関連する分野は多岐にわたるため、分野横断的な取り組みによるまちづくりを推進します。
- ・地域の歴史的資源を、地域でまもり・いかし・つなぐ取り組みを推進し、地域主体のまちづくりの視点を大切にします。

3 戦略の枠組み

- ・「語りたくなるまち名古屋」の実現に向けて、戦略Ⅰ～Ⅳの4つの戦略を定めます。
- ・名古屋の都市構造の視点からの取り組み（戦略Ⅰ・Ⅱ）、身近な地域づくりの視点からの取り組み（戦略Ⅲ）、及び戦略Ⅰ～Ⅲの取り組みを支える仕組みづくり（戦略Ⅳ）によって構成します。
- ・戦略Ⅰは古代から近世（江戸時代まで）の歴史的資源を活かしたまちづくりへの取り組み、戦略Ⅱは近代から現代（明治時代以降）の歴史的資源を活かしたまちづくりへの取り組みとします。



《地域展開のイメージ》



市域の変遷

明治時代

大正～昭和初期

海岸の変遷

縄文期の推定海岸線

新田開発、築港・埋立

城下町

熱田ゆかりの地域

宿場町等

旧集落

名古屋港

主な公園

主な近代住宅地

旧街道

広小路・大津通

100メートル道路

主な運河・河川

主な用水

主な水道

主な鉄道

主な神社

主な古墳

四観音寺

主な武将ゆかりの地

主な城跡等

主な古戦場跡

主な近代都市資産

4 歴史まちづくり戦略

戦略Ⅰ 尾張名古屋の歴史的骨格の見える化

名古屋城と城下町、熱田の杜、城下町を支えた堀川や諸国を結ぶ街道など、古代熱田から近世城下町の時代にかけて形成されたまちの核や軸を、名古屋のアイデンティティ形成の基礎となる歴史的骨格として捉えます。

これらの核や軸を活かし、尾張名古屋の歴史・文化が身近に感じられるまちづくりを進めます。

方針1 名古屋城の再生と城下町のアイデンティティ継承

方針2 悠久の歴史を誇る熱田の魅力向上

方針3 有松・堀川など「まち・むら」をつなぐ「道・水」を活かす



方針 1 名古屋城の再生と城下町のアイデンティティ継承

徳川家康の権威のもと、当時の技術と文化の粋を集めて築かれた名古屋城については、近世城郭の代表例であるとともに、名古屋のまちのシンボルとして 400 年の歴史を歩んできた歴史をふまえ、城郭全体の再生に取り組みます。

また、碁盤割の町割や旧跡を今に伝え、武家や町人の暮らしとともに名古屋の文化の中心を担ってきた城下町については、その歴史・文化を継承し、未来に伝えていきます。

（１）名古屋城の再生

大都市の中心部に位置しながら、近世城郭の縄張りの原状や風格をとどめている名古屋城の城郭について、その全体を名古屋の代表となる歴史資源として一体的に捉えて、世界に誇る歴史的・文化的シンボルとしての再生を目指します。



■本丸御殿の復元

- ・日本を代表する武家風書院造の御殿である本丸御殿については、市民の協力を得ながら、近世武家文化を守り伝え、国内外へ名古屋の文化のすばらしさを広めるものとして復元します。
- ・復元にあたっては、戦災による焼失前と同等の文化的価値を有し、かつ市民の財産として広く活用できるように復元します。



■名古屋城跡全体の魅力向上

- ・東南隅櫓や表二之門などの重要文化財をはじめとする建造物、1,000 点を超える重要文化財を含む美術工芸品、国指定名勝二之丸庭園、国指定天然記念物の「カヤ」の木、その他往時の遺構を残す石垣・堀・土塁など、名古屋城の歴史的価値を構成する多くの資産を保存・整備し、その価値を後世に伝えていきます。
- ・尾張徳川家藩主の居館があり、藩政の拠点ともなった二之丸については、名勝二之丸庭園を中心とした環境整備を進めることにより、名古屋城の歴史的遺構を表す地区としての保存・整備を推進します。
- ・天守閣については、鉄骨鉄筋コンクリート造による再建後50年以上が経過しているため、改修に向けた調査を行います。また、木造による再建については、その是非を含め、将来的な課題として可能性を検証していきます。



■ 天守閣の眺望景観の保全

- ・名古屋のまちのシンボルである名古屋城天守閣の眺望景観について、天守閣からの眺望の保全とともに、テレビ塔をはじめとする主要な視点場からの眺望景観の保全を図るため、城郭及びその周辺において、建造物の規制・誘導等について検討します。



テレビ塔からの眺望景観

■ 緑地・水辺の保全と活用

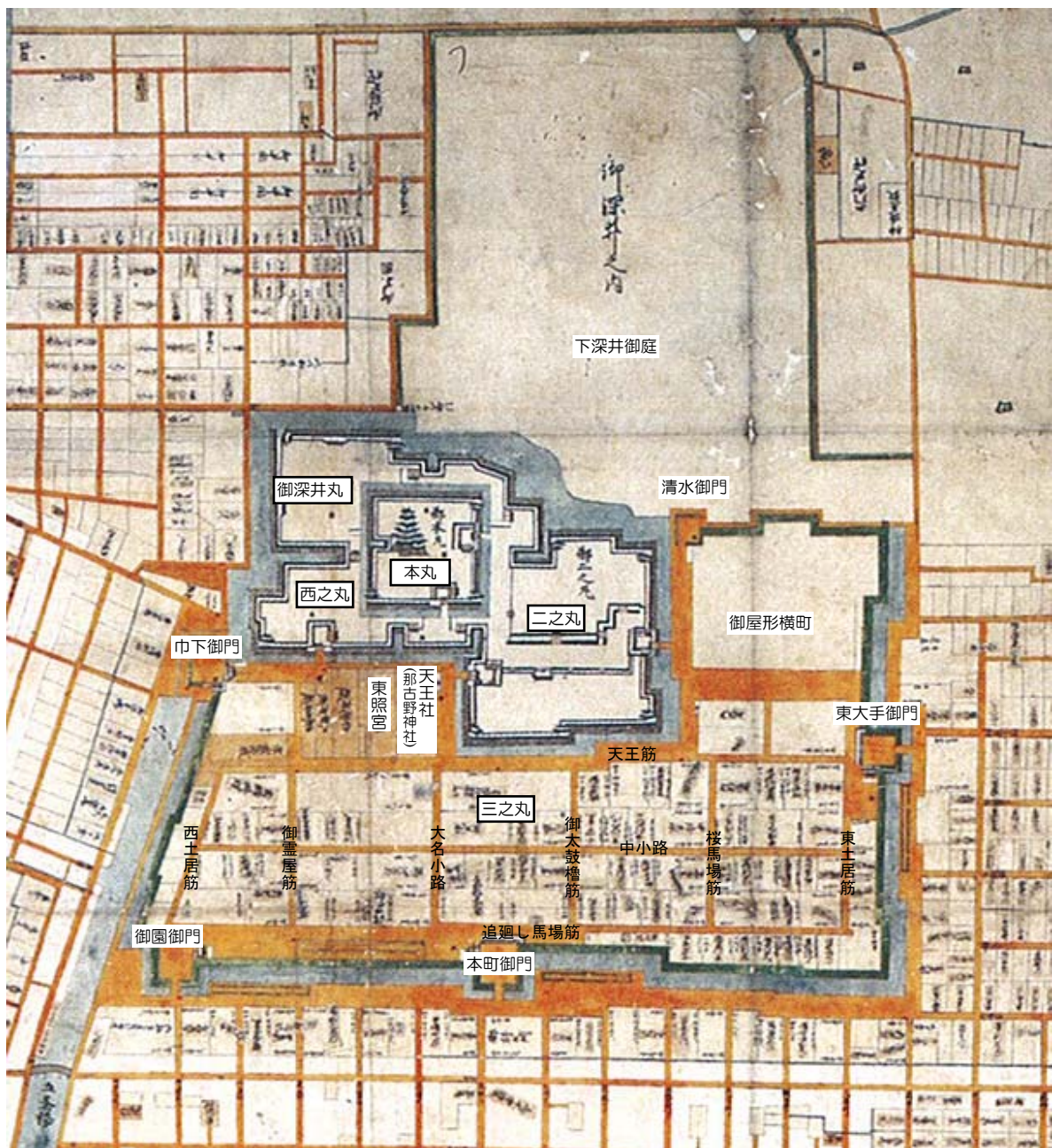
- ・名城公園や堀割をはじめとする城郭内の緑地・水辺については、都心に残された貴重な自然環境としての保全を図るとともに、歴史的環境と調和した公園緑地としての役割もふまえた環境整備に努めます。
- ・三之丸外堀跡については、城の広がりや城下町との関係が実感できる遺構として保存・活用を図るため、史跡の保存修理工事を図りながら、案内板の整備や周辺における遊歩道の整備に努めます。



● 歴史的建造物等 郭内申し合わせ区域 [] 史跡指定範囲 [] 史跡範囲（未告示）

■三の丸（官庁街）の風致・景観の維持・向上

- ・戦後、三の丸（三之丸）に形成された官庁街については、「申し合わせ」による建築制限により風致・景観を維持してきた経緯を踏まえつつ、城郭の歴史的環境に配慮した風致・景観の維持・向上を目指します。
- ・官庁街形成の先鞭として戦前に建設され、帝冠様式の格調高い意匠を今に伝える市役所本庁舎・県庁本庁舎が並立する景観を継承し、市民共有の財産としていきます。
- ・上級武家屋敷地として形成された三の丸の歴史をふまえ、江戸期の通り名の由来や風景を語り伝えるなどし、往時の風景が感じられる環境づくりに努めます。



ひら
尾府名古屋図（宝永(1704)～正徳(1715)） 名古屋市蓬左文庫蔵

歴史的資源の豆知識 【名古屋城】

名古屋城は、名古屋台地の北端に位置し、北側を湿地帯に面する場所にある。名古屋台地は南が熱田の海に至る南北に長い台地であり、この地は、平安時代から那古野の地名をもって知られており、交通の利便のよい地であった。

徳川家康は、第九子の義直に尾張の地を与え、居城としたが、地の利の点などから、この地に城を築くことにし、牧助右衛門ら五名を普請奉行に任じ、慶長15年（1610年）に縄張を実施し、加藤清正、福島正則等西国の大名の二十名に築城助役を命じた。また作事奉行には大久保石見、小堀遠江ら九名を任じて、建築工事に当たらせ、慶長17年に天守閣が完成した。

名古屋城は、その後約250年間、徳川御三家筆頭尾張徳川家の居城とされてきたが、明治時代には陸軍省鎮台、宮内省離宮となり、昭和5年（1930年）には宮内省から名古屋市に下賜され、建物24棟が国宝（旧国宝）に指定された。以後は名古屋市により管理されてきたが、主要な建物は、戦災により焼失し、城跡は昭和27年（1952年）に国の特別史跡に指定された。なお、城跡には、昭和34年（1959年）に鉄骨鉄筋コンクリート造により天守閣が再建されている。

（「名古屋の史跡と文化財（新訂版）（平成3年）」などより）



西北隅櫓（重要文化財）



東南隅櫓（重要文化財）



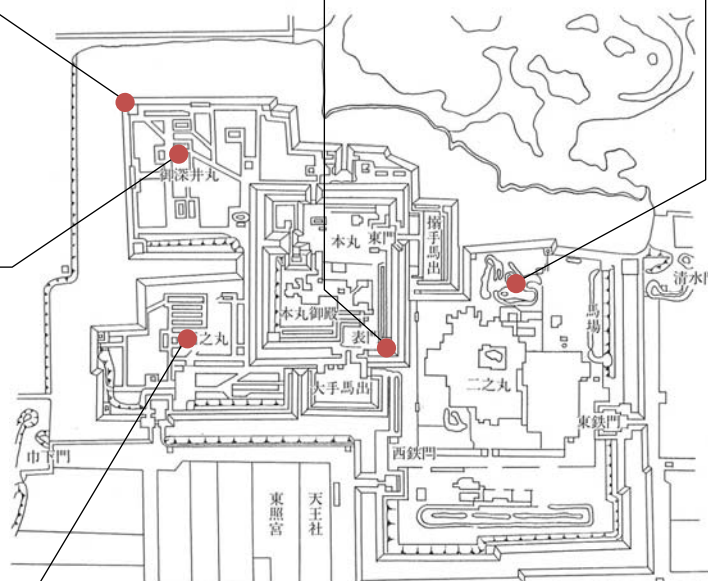
名勝二之丸庭園



乃木倉庫（登録有形文化財）



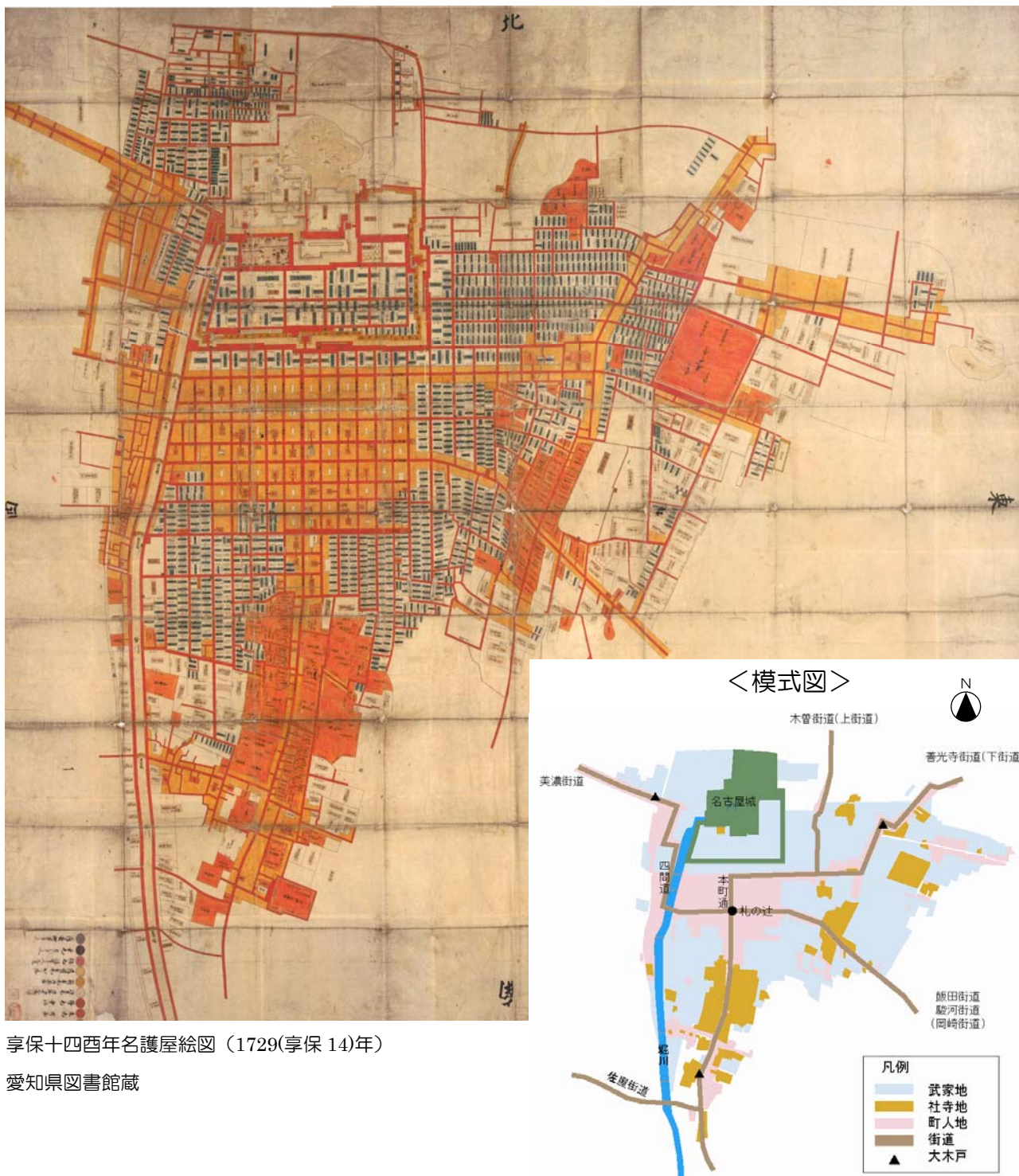
名古屋城のカヤ(天然記念物)



名古屋城城郭全体図（享保14年）

（２）城下町における界隈の特色を活かしたまちづくり

名古屋城の築城とともに形成され、現在の都心部を構成する旧城下町については、戦災を免れた貴重な歴史的資源を継承していきます。また、碁盤状の町割を継承する城下中心部をはじめ、旧武家地、旧町人地、旧寺町などの歴史的な界隈において、地域の歴史的資源を活かした特色あるまちづくりを推進します。



■城下中心部

- ・開府当初から継承されてきた碁盤状の町割について、広小路・本町通に代表される江戸期の町名・通り名の由来や風景を語り伝えるなどし、歴史が身近に感じられる都心づくりを推進します。
- ・都心の街区内部に残る社寺地等の緑地の保全に努めます。また、都心部において再開発等を行う際には、かつての閑所の機能・役割を意識し、街区内部において緑地やオープンスペースを効果的に配置するなどし、まちの中庭的役割を内包する集い・憩いの空間の継承・再生に努めます。



旧町名由来総合解説板（中区役所前）



旧町名由来案内プレート

歴史的資源の豆知識 【江戸時代の城下町】

江戸時代を通じて、名古屋は、徳川御三家筆頭尾張 62 万石の城下町として発展を続けた。とりわけ、元禄から享保、元文にかけた時代には七代藩主宗春のとった自由積極政策などによって、文化・経済が一段と隆盛し、東西の文化を取り入れながら名古屋固有の文化をはぐくみ、江戸、大坂、京都に次ぐ盛況をみせるようになった。

城下町の町並みのなかでは、本町通や京町筋、伝馬町筋などに主だった商家が軒を連ねて活況を呈したほか、堀川端に米や塩、肥料などを納める倉庫群や土蔵造りの商家、木曾の木材を扱う材木商などが集められた。また碁盤割の各街区の中央にできた空地は、「閑所」とよばれて周囲の商家の会合などに利用された。後に、閑所には社寺や長屋が建てられるようになり、これらに通じる路地のことも閑所とよぶようになった。

大須観音や若宮八幡社の境内や門前、広小路（万治の大火の後、堀切筋の一部が 15 間に拡張されて、広小路とよばれた。）などに、芝居小屋や茶店が立ちならび多くの人々でにぎわっている様子、堀川での舟遊びや堀川端の桜見物を楽しむ人々の様子などを表した図絵が今も残されており、当時の名古屋の景観をしのばせる。

しかし、江戸時代の名古屋の景観を代表するものは何と云っても、「尾張名古屋は城でもつ」と俗謡にもうたわれた、金鯱の輝く 5 層の大天守閣をもつ名古屋城の雄姿であったろう。それは単に天守閣がランドマークとして際立ったというばかりではなく、本丸上洛殿や二の丸庭園等を含めて、名古屋城が近世の武家文化を代表する最高傑作のひとつであった、ということによるものである。

（「名古屋市都市景観基本計画」などより）

■城下西部

- ・清須越とともに堀川端に商人町として形成され、現在でも江戸期の土蔵群と町家が残る四間道地区においては、歴史的建造物や町並みを保存・活用し、周辺の水辺（堀川）や商店街との連続性を活かした界隈としての魅力向上を図ります。
- ・町並み保存地区については、地域と行政が連携しながら、旧城下町の面影を残す江戸期の貴重な町並みを持続的に保存・形成していくためのあり方を検討します。あわせて、地区内で長期未整備となっている都市計画道路の見直しを進めます。
- ・四間道地区の歴史的環境の核となる文化財指定されている建造物等については、将来的に保存・活用が図られるように努めます。
- ・美濃街道～四間道周辺における、産業文化や歴史文化の集積を活かし、地域全体の魅力を高める「ものづくり文化の道」構想を推進します。



四間道地区の町並み



四間道地区の町家



五条橋（堀川）

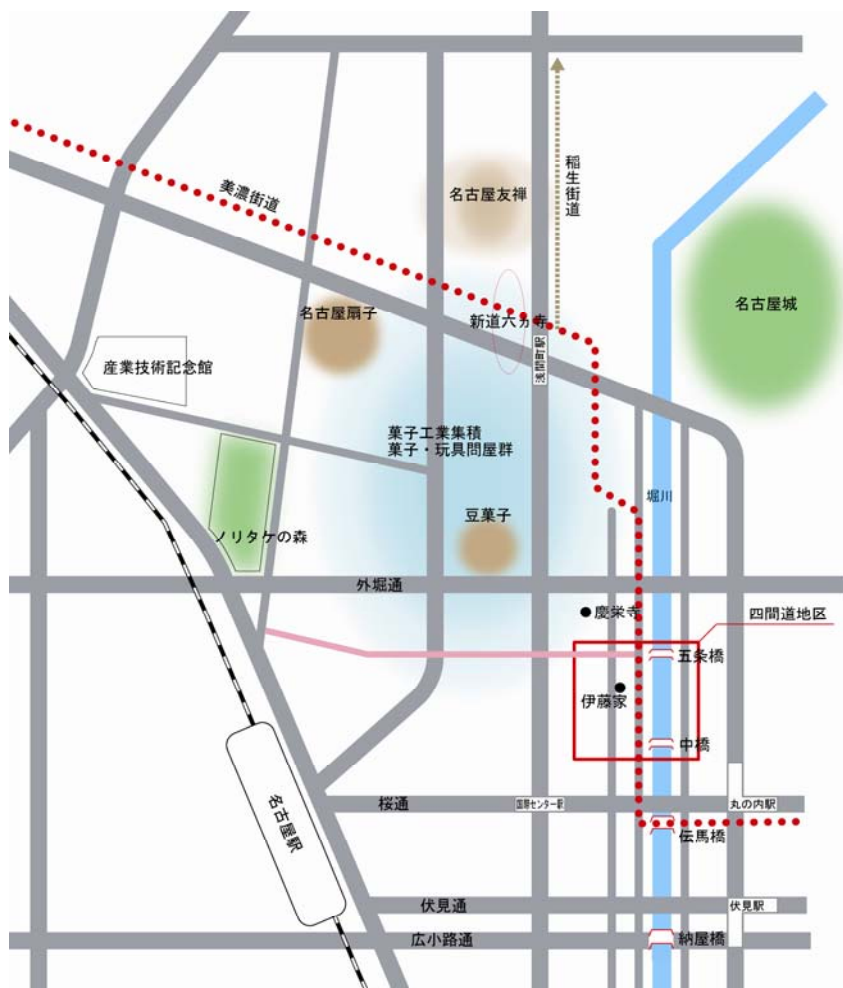


屋根神様

四間道地区



- 四間道町並み保存地区
- 美濃街道
- 商店街



■城下東部

- ・白壁・主税・榑木町筋周辺においては、旧城下町の武家屋敷地の町割を基盤とした門・塀・樹叢からなる町並みを継承するとともに、都市景観形成地区の指定等により、質の高い閑静な住宅地としてのまちなみ形成を図ります。
- ・徳川美術館及び蓬左文庫においては、国宝指定の美術工芸品や多数の古典籍など、尾張徳川家ゆかりの貴重な文化遺産が継承されています。また、大名庭園の歴史を引き継ぐ徳川園を含めた施設全体の歴史的環境の整備を推進するなどし、文化・観光施設としての魅力向上を図ります。
- ・観光ルートバスの運行や、建中寺をはじめとする周辺の歴史的建造物を活かした界隈の魅力向上に努めるなどし、名古屋城とともに近世武家文化を国内外に発信できる環境を整えていきます。



町並み保存地区
(白壁・主税・榑木)



徳川園庭園



建中寺(山門)

歴史的資源の豆知識 【徳川美術館】

徳川美術館は、侯爵 徳川義親氏の寄贈に基づき、尾張徳川家に伝えられた数々の重宝、いわゆる「大名道具」をそっくりそのまま収め、展示・公開している他に例を見ない美術館で、財団法人徳川黎明会（昭和 6 年設立）によって昭和 10 年 11 月、もと尾張徳川家別邸の一角に開設された。昭和 62 年秋には、開館 50 周年を記念して行った増改築工事が完了して、装いも新たにオープンし多くの入館者で賑わっている。

収蔵品は徳川家康の遺品を中心に初代義直（家康第九子）以下代々の遺愛品やその家族が実際に使用した物ばかり一万数千件に及ぶ。世界的にも有名な「源氏物語絵巻」をはじめ国宝 8 件、重要文化財 46 件、重要美術品 44 件を含み、徳川美術館ならではの豊富さ、質の高さ、そして保存状態のよさを誇っている。

（「名古屋の史跡と文化財（新訂版）（平成 3 年）」などより）

歴史的資源の豆知識 【建中寺】

建中寺は二代尾張藩主徳川光友が父義直の菩提を弔うため、慶安 4 年（1651）、城下東方の古井村の地に創建した寺である。周囲は石垣と堀で囲まれ、境内は約 4 万 8000 坪（約 16 万平方メートル、ナゴヤドームの 10 倍以上）の広さをほこった。寺領は 500 石で、尾張藩領の寺院のなかでは最大の寺領を所有していた。境内には、二代光友から 13 代慶^{よしつぐ}臧まで代々の尾張藩主の廟・御霊屋が建立された。天明 5 年（1785）の火事で当初の建物の大半が焼失したが、翌天明 6 年から 7 年にかけて再建された。建中寺は尾張藩浄土宗西山派の触頭で、同派の末寺を支配した。また他の寺院と違い犯罪人の赦免することができる権利を藩から与えられていた。実際には、歴代尾張藩主や一族の葬送、法事の際には赦免や減刑が行われた。

（「開府 400 年記念特別展 名古屋 400 年のあゆみ（名古屋市博物館）」などより）

■城下南部

- ・大須周辺においては、門前町周辺の盛り場としての面影を引き継ぐ、特色ある文化施設（演芸場・スタジオ）や商店街などをまちづくりに活かし、下町の文化・賑わいの再生を図ります。
- ・城下町の南端に位置し本町通を軸として形成された橘町周辺においては、仏具・仏壇等の伝統産業の集積や、旧商家や社寺等の歴史的建造物などを活かした界隈の魅力向上に努めます。



大須観音



大須商店街



塗籠造の商家（橘）

歴史的資源の豆知識 【大須観音（真福寺宝生院）】

北野山真福寺宝生院は真言宗、俗に大須観音で著名である。発端は12世紀末頃、尾張中島郡長岡庄大須村（岐阜県羽島市）に建立された観音堂である。14世紀代に伊勢の能信上人が来住し、次第に堂塔、僧坊が造営され、北野山真福寺宝生院と号し、聖観音像を本尊として安置、南朝側の帰依をうけた。ことに、能信は仏教のみならず、広く神道ほかにも通じ、各地を訪れた傍ら書籍の書写を行い、今日の大須文庫の基礎をつくりあげ、15世紀半ばに全盛時代を迎えた。

その後、世が乱れ、また度重なる木曾川の水害によって荒廃したため、徳川家康は、天下の三経蔵と称せられた当寺の貴重な書籍文書類に注目し、洪水を避けて名古屋城下にこれを移した。

しかるに、明治年中、火災にあい、また太平洋戦争の戦禍によって再度すべてを失ったが、幸いにも文庫は災を免れ、本堂の改築も成り仁王門なども復旧した。

（「名古屋の史跡と文化財（新訂版）（平成3年）」などより）

歴史的資源の豆知識 【万松寺】

曹洞宗、山号は亀岳山。能登総持寺の末寺。本尊は千手観音像。織田信秀が天文9年（1540）名古屋村に建立し、大雲永端を請して開山とした。信秀の法号万松院桃巖道見より寺号が定められている。慶長15年（1610）名古屋城築城の際、現在地に移った。寺記では天文7年の建立、清須越の寺とするが、『尾張志』はこれを誤りとしている。また、信秀の没（天文20年）後の建立とする説もある。かつて天文10年の織田信秀制札、慶長4年（1599）の福島正則制札などを伝えていた。はじめ白坂雲興寺（瀬戸市）の末であったが、享保8年（1723）総持寺末に改めている。江戸時代には500石を与えられ、堂宇も修造を重ねたが、昭和20年戦災によって焼失した。

（「名古屋の史跡と文化財（新訂版）（平成3年）」などより）

(3) 伝統文化・伝統産業の継承

城下町を中心に発展した名古屋独自の伝統文化や伝統産業については、時代の潮流をふまえつつ、先人の知恵や技術を保存・継承し、次の世代に伝えていきます。

■伝統文化の継承

- ・東照宮祭・若宮八幡宮祭・天王祭など、江戸期から続く城下町の伝統祭事や、ものづくりの原点でもある山車・からくりの保存・継承に努めます。
- ・茶、能、舞踊、邦楽、名古屋ことばなど、かつて「芸どころ」と呼ばれた江戸期からの伝統を引き継ぐ名古屋独自の文化について、文化基金の活用等を通じた情報発信や担い手の育成に取り組むなどし、都市の文化魅力の継承・創出につなげていきます。



和泉流狂言



東照宮祭礼図巻（江戸後期） 名古屋市博物館蔵



山車揃え

歴史的資源の豆知識 【名古屋の文化的背景】

名古屋がこの地域の拠点として発展する契機となったのは、1610年の名古屋城の築城開始と、それに伴って清須の町が名古屋城の城下町として移転してきたこと（清須越）にあります。

江戸期においては、尾張徳川家の初代藩主義直、七代藩主宗春など歴代の藩主の多くが、文化や学問の振興に取り組み、さまざまな文化活動が活発になりました。特に茶華道や能など、武家のたしなみとされる文化が花開くとともに、町民にも芝居などの文化が広まりました。また、俳諧、文学、出版、歌舞伎、長唄など、幅広い分野の文化・芸能が飛躍的に盛んになり、「芸どころ名古屋」の気風が培われました。

名古屋は、木曾からの木材の集散地であり、木材を細工する技能に富んだ土地柄です。その流れを受け、江戸時代には、華やかな人形からくりとお囃子を持つ山車が作られ、現在にもその伝統は息づいています。明治以降はその技術が自動車や航空機産業をはじめとする近代産業に発展してきました。また、瀬戸、常滑など良質の陶土の産地が近くにあり、焼き物なども盛んであるなど、現在のものづくり文化の礎となっています。

（「名古屋市文化振興計画」などより）

■伝統産業の継承

- ・地域の歴史と風土に根ざし、きめ細やかな「ものづくりの心」を伝え、人々の生活に豊かさと潤いをもたらす伝統産業の振興を図るため、広報・PRなどによる普及啓発や、担い手育成などを推進します。
- ・国際デザインセンター等を通じた異業種間の交流・連携の促進を支援するなどし、先人の知恵と技術を活かした新たな価値の創出を図ります。



名古屋友禅



名古屋仏壇



和菓子（牡丹の花）

歴史的資源の豆知識 【名古屋の伝統産業】

名古屋には、尾張藩の城下町として栄える中で高い技術を有する数多くの産業が育ちました。現在もこれらの産業が数多く残り、長い歴史と文化に培われた伝統産業製品は内外の人々に愛されています。

名古屋の伝統産業としては、「伝統的工芸品産業の振興に関する法律（伝産法）」（昭和 49 年制定）に基づき、伝統的工芸品として指定されている有松・鳴海絞をはじめとする 6 品目のほか、名古屋扇子や木桶など様々な品目があります。

これらの名古屋の伝統産業関係業界が密接に連携し、伝統技術・技法の継承、販路の開拓など事業の促進をはかり、その振興と市民生活の向上、地域経済の発展に寄与することを目的として「名古屋伝統産業協会」が、昭和 54 年 9 月に設立されました。会員は、名古屋及びその近郊地域において伝統産業にかかる事業を営む事業所で構成する団体で、理事会の承認を得たものです。現在、加盟団体は 12 業種 11 団体となっています。

なお、ここでいう伝統産業とは、主として日常生活の用に供されるもので、製造過程の主要部分が手工業的であり、伝統的（江戸時代以前の歴史がある）な技術又は技法により製造されるものです。さらに主たる原材料が伝統的に使用されてきたものであることが必要となります。（名古屋市産業経済課）

※「伝統的工芸品産業の振興に関する法律（伝産法）」に基づき、伝統的工芸品として指定されている品目

- | | |
|------------------------------|-----------------------------|
| ・有松・鳴海絞（昭和 50 年 9 月 4 日指定） | ・名古屋仏壇（昭和 51 年 12 月 15 日指定） |
| ・名古屋桐箆簞（昭和 56 年 6 月 22 日指定） | ・名古屋友禅（昭和 58 年 4 月 27 日指定） |
| ・名古屋黒紋付染（昭和 58 年 4 月 27 日指定） | ・尾張七宝（平成 7 年 4 月 5 日指定） |